

# ユートピア研究

理想郷、桃源郷、楽園、理想都市、コミュニティー、自給自足社会、共同村、共働農場

国際サバイバル道場  
自己確立を目指して

ユートピア研究  
ユートピア実現への試み

ラテンアメリカはいかがですか  
Praxis Latinoamericana!!

Latin American  
Development Net  
ラテンアメリカ開発支援ネット



## 目次

### ユートピア概論

[ユートピアとは](#)  
[トーマス・モアのユートピア](#)

[ユートピア実現事業](#)

### ユートピア実現の試み事例

[1.ピューリタンの民主主義社会](#)

[2.クエーカーたちの理想都市](#)

[3.シェーカーズ教徒村](#)

[4.イエズス会のミッション](#)

[5.ユートピア社会主義者の夢](#)

[6.オーウェンの協同組合](#)

[7.フリエの生産・消費協同社会](#)

[8.ロシアの農民ユートピア国](#)

[9.トルストイの「イワン王国」](#)

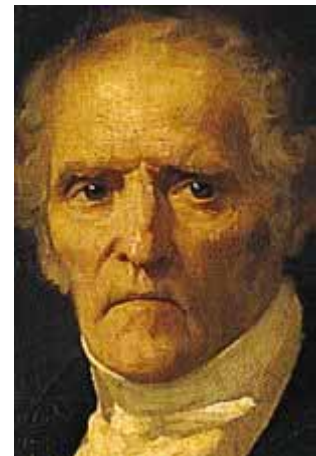
[10.ガンジーの「インド独立国家」](#)

[11.武者小路実篤の](#)

## シャルル・フーリエの産業的協同社会的新世界

集合計画都市である「ファランクス」

フランスの偉大な空想社会主義者のひとり。商人であった体験からブルジョア社会の悪弊を手ひどく批判した。独特の発展段階に立つ歴史観から理想社会のくことを予想し、その社会組織を構想したが、その費用を出してくれる篤志家のあらわれるのをむなしく待ちつづけた。代表的作品に『産業的協同社会的新世界』がある。



同時代のサン＝シモンとちがって、半分頭のおかしかったシャルル・フーリエはがちがちのユートピア主義者だった。反国家、反産業、反リベラル、反競争、反都市ではあったけれど、私有財産を廃止したがった社会主義者とは距離を置いた。かれの描いたユートピア社会は宇宙との「自然な調和」を保ち、それは非暴力的な手段で実現できるものだった。かれの提案は「ファランクス」という一種の生産・消費協同組合組織または社会を設立することだった。主要著作 Réforme industrielle で、フーリエは多くの支持者を集めて、その多くはこうしたミニ社会を設立しようとした(そして失敗した)。マルクス派からは毛嫌いされる。

### フーリエの生涯と思想



[「新しき村」](#)

[12.毛沢東の「人民公社」](#)

[13.伊藤勇雄の人類文化学園](#)

[14.農大生たちの「杉野農場」](#)

[15.ブラジルの弓場農場](#)

[16.シュタイナー「ひびきの村」](#)

[17.ヤマギシ会「ヤマギシの村」](#)

[18.脱日本運動の「ノアの方舟」](#)

[19.パラグアイのメノータ社会](#)

[20.モルモンの理想郷ユタ](#)

[21.アドベンチストの学園村](#)

[22.イスラエルのキブツ](#)

[23.エホバの証人の地上天国](#)

[24.デンマークの共同体](#)

[25.ヒッピーの生活共同体](#)

[26.マレーシアのイスラム村](#)

[27.ドイツの学生生活共同体](#)

[28.宮沢賢治のイーハトーブ](#)

[29.宮崎駿のユートピア文学](#)

[30.南米の理想郷「インカ都市」](#)

[31.国宝美術作品の理想郷図](#)

[32.未来都市ブラジリア](#)

[33.都市工学のユートピア「海市」](#)

[34.宇宙空間のユートピア計画](#)

フーリエは1772年4月にフランス東部の町、ブザンソンに、富裕な毛織物・香料商人の長男として生まれた(ブルードンが同じこの町に生まれたのは37年後のことだった)。

「フーリエは幼少の時から不正や抑圧を憎む気性が激しく、家業の商売上のことで正直であったために両親から罰せられた少年は、嘘つきを常道とする商業に対して、復習の誓いを立てたといわれる。商業に対する憎しみは、事実、彼の生涯を貫くことになる」(中央公論社『世界の名著』42の解説より)

「強情ではあったが、感情がこまやかで思慮深く、勉強好きの少年」(同)だったフーリエは、測量担当の軍事技師を志したが、家業を継ぐことを余儀なくされる。1793年、21歳で父の遺産を元手にリヨンで米・綿花・砂糖など植民地商品の取引に乗り出したフーリエは、革命派と反革命派の抗争に巻き込まれ、リヨンを包囲した革命軍によって商品を台無しにされ投獄までされて全財産を失った。「この災難によって、彼は商業に対してと同様、暴力や革命に対して徹底的に憎む気持ちで、生涯、もちつづけるようになった」(同)という。

その後、彼は雇われ商人としてヨーロッパ各地を巡り歩き見聞を深める。しかし、彼が拠点とした商工業都市リヨンの活気とその経済的社会的矛盾、労働者の貧困を目の当たりにしたことが彼の思想形成の基礎になったようだ。

彼は1808年に匿名で刊行した『四運動および一般的運命の理論』で、「彼自らが発見したとする社会運動の法則を、情念引力に基づいて、宇宙論的スケールで説明」(同)するが、社会的反響はほとんどなく、第二の著書、『家庭的農業的協同社会概論』を1822年に刊行するまで14年を要する。さらに、1829年には『概論』を要約し読みやすくした第三の著作、『産業的協同社会的新世界』を発行、情念引力の法則に基づく文明社会批判と未来の普遍的調和的社会的建設を説く(この『新世界』の校正に当たったのが印刷所の校正係をしていた20歳のブルードンで、彼は「6週間の間、この奇妙な天才の虜になった」と後に語った)。彼が65歳の生涯を孤独のうちに閉じたのは1837年10月10日のことだった。

痛烈な「文明社会」批判

フーリエの「文明社会」(あるいは「産業主義」)批判、つまり資本主義批判は容赦なく、辛辣極まりない。以下は、『産業的協同社会的新世界』からの引用

- [35.ユートピア的企業](#)
- 例:トヨタ
- [36.1-ピア社会造り企業](#)
- 業:松下
- [37.ユートピアを模索する産業](#)
- [38.ユートピア商売のリゾート産業](#)
- [39.フィンドホーン共同体](#)
- [40.生産勤労共同体「共働学舎」](#)
- [41.共生共存企業「わっぱの会」](#)
- [42.無所有奉仕共同体「一燈園」](#)
- [43.小さな共同社会「癒しの郷」](#)
- [44.宗教的社会福祉企業の大倭教](#)
- [45.理想的社会造りのNPO](#)

## ユートピアの条件:自給自足

- [1.自給自足の生活と概念](#)
- [2.自然農法、有機、無農薬他](#)
- [3.自給自足を目指した試み](#)
- [4.本サイトの結論](#)

### 作者の他のサイト

[ラテンアメリカはいかがですか](#)  
[ブラジル](#) [パナマ](#)  
[国際サバイバル道場](#)

2003年2月25日より

である(訳文は中央公論社前掲書より)。

彼は言う、「産業主義」は「科学的妄想」であり、「比例的報酬についての何らの方式も持たず、また生産者もしくは賃金労働者が富の増大の分け前に与るための保証を何一つもたずに、雑然と生産を行う精神錯乱」である、「だからわれわれは、産業の盛んな地域が、この種の進歩とは無縁な地方と同じくらいに、いやおそらくはそれ以上に多くの乞食でみちあふれているのを目にする」のだ、と。

絹織物工場は子供を1日19時間も拘束し働かせているが、これは「事実上復活した奴隷制」だ。

ダブリン(アイルランドの首都)の労働者は飢えで苦しんでいるが、お偉方はこの流行病にかかる心配はない、彼らがかかるとすればむしろ「消化不良」だ。飢えにも「激しい飢え」「窮乏による緩慢な飢え」「(商人が売り惜しみしたため品質が落ちて)不健康なものを食べることを余儀なくする投機的な理由による飢え」「過度の労働などによる切迫した飢え」など色々ある。

2千5百万人のフランス人は葡萄酒を口にしていないのに、「人々は過剰生産のために、全収穫物を排水渠に投げ捨てることを余儀なくされているのだ」。

「毎年毎年、諸国民の富に関するいくつもの新たな哲学が現れている。書物の中には何と多くの富があり、藁葺きの家の中には何と多くの貧困があることか」(A・スミスへの当てこすりだ)

「経済学は1826年の多血症的恐慌によって途方に暮れた」、ようやくシスモンディが「消費が転倒したやり方でなされていること、つまり消費が遊び人の気紛れに基づいているのであって、生産者の幸福に基づいているのではないこと、を認めた」が、これは「中途半端な証言」だ。

「流通は転倒しており、生産物の所有者となることによって生産者や消費者から暴利を貪り、また買い占め、投機売買、常習的詐欺、ゆすり、破産等の陰謀によって産業的体系に無秩序をまき散らす商人や卸業者という名の仲介人に行われていること、また、競争は転倒しており、賃金を低下させる傾向を持ち、また産業の発展によって人民を貧苦に導くこと、つまり、競争が激しくなればなるほど、労働者は競争相手の多過ぎる労働を捨て値で受け入れることをいっそう余儀なくされること、また他方、商人の数が増えれば増えるほど、彼らは利益を得ることが困難であるために、いっそうのペテンに導かれること、は明白ではないか？」



ゲストブック 掲示板

メインサイトへ



管理者

Web Master

## 関連サイト

[1. ユートピア社会主義者たちの理想と現実](#)

[2. ユートピア主義者や社会主義者](#)

[3. 社会主義観の変遷](#)

[4. Charles Fourier](#)

[5. ユートピア社会主義者達の夢](#)

「産業は、よりいっそう顕著な壊乱状態を呈している。それは、全体的と個人的との二つの利害の不一致である。あらゆる産業者は大衆と反目しており、個人的利害のゆえに大衆に対して悪意を抱いている。医師は同胞市民が重い熱病にかかることを願い、また検事は各家庭で大きな紛争が起こることを願う。建築家は町の四分の一を灰燼に帰す大火事を必要とし、ガラス屋は窓ガラスという窓ガラスを割る激しい雹を願う。……まさにこのようにして、文明社会の産業においては、あらゆる個人が大衆と意図的に反目している。これは、反協同社会的産業、つまり転倒した世界のもたらす必然的結果である」

「産業のこうした悪循環が存在することをよく理解しているので、人々はいたるところで産業に疑問をさしはさみはじめ、文明にあっては貧困が豊富そのものから生じることに驚き始めている」。

## エンゲルスの賛辞

こうしたフーリエの「文明社会」批判にエンゲルスは惜しみなく高い評価を与えている。エンゲルスが「サン・シモンにおいて、われわれが見たものは一つの天才的な広大な視野であった」が、「フーリエにみるのは現在の社会状態に対する純フランス式な機知に富んだ批判で、しかもそれが相当深刻である」(『空想より科学へ』)と書いているのを想起されたい。

また、エンゲルスは「フーリエは偉大な批評家であるだけでなく、彼のいつもかわらぬ朗らかな本性は、彼をして諷刺家、しかも古今を通じて最大の諷刺家の一人たらしめているのである」と最大限の賛辞を贈っている(同)。

さらに先ほどの引用の中にある「多血症的恐慌」というフーリエの表現について、エンゲルスは『反デューリング論』で、「フーリエが最初の[ = 1825年の ]恐慌を *crise plethorique* すなわち過剰からくる恐慌と名づけたのは、すべての恐慌にぴったり当てはまる言葉であった」(岩波文庫版下巻)と評している。

また、エンゲルスは、フーリエが文明の「悪循環」と矛盾を指摘して、「文明にあっては貧困が豊富そのものから生じる」と喝破した点を捉えて、「このようにフーリエの弁証法の駆使は彼の同時代人ヘーゲルにくらべて決して劣らない」(『空想より科学へ』)と褒め称えている。エンゲルスがどれほど高くフーリエを評価していたかが分かるであろう。

### 「協同社会」の見取り図

彼が「自然的な」あるいは「調和的な協同社会」として描く未来社会も興味深く、示唆に富んでいる。

フーリエによれば、「文明社会」には「二つの根源的な悪、すなわち農業の分散細分化および商業の虚偽」がまかり通っている。彼は「非協同社会的経済学、つまり分散細分化の理論」にあっては「産業における小破壊者である小生産者を鼓舞」してきたが、それはまったくの誤りだと説く。彼が最初から小生産の対立者として登場しているのは興味深い。彼には小生産者を美化したり、その体制の永続を約束することで彼らの支持をかき集めようなどという卑しむべき追従根性とは無縁なのだ。

フーリエによれば、協同社会は本質的に「大規模な結合体」でなければならない。「大規模な結合体」にあっては「各種の職務において、われわれの小規模な世帯の複雑さが必要とする人員と器具の百分の一しか用いない」で済む。

彼が古代マケドニア軍の方陣ファランタスからとってファランジェと名づけた生産と消費・生活全体にわたる協同体は、千八百名を最も適正な規模とし、一人当たり一ヘクタールの農地を持つ。ファランジェの住民はファランステールと呼ばれる四階建ての広大な協同宿舎で生活し、その周辺には農園、作業所、教会、情念取引所、教会、劇場などが配置されている。

この結合体にあっては、たとえば1800名の人間のために料理を作るのに文明社会のように300人の主婦は要らず、機械を利用するためもある十名の専門家で足り、しかも様々な種類の料理を豊富に用意することができる。

「燃料の節約は歴大であり、また、実施不能の数多くの森林法よりずっと効果的に、森林や風土の修復を確実なものとする」し、「家事労働は非常に単純化され、その結果、主婦と召使いの8分の7に時間の余裕ができ、生産的な労働に充当できるようになる」

こうした協同社会的結合体には、その他にも「何もすることなく……生産をあげる」という利点がある。「組み合わせられた活動休止」、たとえば漁の開始と終了時期を取り決め乱獲を防ぐことにより魚の量は2倍になる。「小さな盗みが妨げられることによる節約」も馬鹿にはならない。果実の盗難防止のために石垣を作ったり監視する労働は不要になるからだ。

何よりも「商業制度への真実の導入」によって商業

= 寄生的な産業に従事している働き手と資本の20分の1だけですべては済むようになる。

さらに、「司法官職」「軍人、税関吏、徴税吏」「召使い」等々の不生産的な人間が一掃されることによる利点も大きい。

「実際、もし男、女、子どもが、3歳の時期から老衰期に至るまで快樂に基づいて労働するとすれば、また、器用さや情熱や機械や活動の統一性や自由な交通や風土の修復や活力や人間および動物の長寿が産業能力を無限に高めるとすれば、累積した可能性は生産高をずっと早く十倍に高めるであろう」

それだけではない、「情念引力」(=「熟慮反省に先立って自然によってもたらされ、理性や義務や偏見等々の反対にもかかわらず、いつまでも存続する衝動」)、特に「移り気情念」「密謀情念」「複合情念」という三つの原動力を巧みに活かし総合することで、人々の能力と適性は最大限に発揮され、人類はより高度の調和的な協同社会へと飛躍するのである。

「移り気情念」とは変化や新規さに対する欲求であり、これを活かすためにファランジェでは、人々は平均2時間単位で仕事を変え、翌日はまた農業・製造業の様々な分野で別の仕事を担う。これによって人々は一つの労働に縛り付けられることによって退屈したり意欲を失うこともなく新鮮に楽しく労働する。

「密謀情念」とは冷静な精神と陰謀への熱中であり、これはいくつもの集団が互いに生産や品質などで競い合い相互に向上することに寄与する。「複合情念」は「盲目的な激情」「有頂天や感動の状態」であり、これは生産や人間関係における熱狂や調和を生み出す。

こうした「情念引力」を効果的に組織し総合するには、それを発揮させるための機構が必要なことはいうまでもない。「系列機構がこのように下ごしらえされて初めて、人々は引力の諸特質、すなわち、その幾何学的な正確さや、快樂の交替による行き過ぎの防止や、美食術の洗練に比例して高まる産業への熱意および仕事の完全美や、美德に至る手段となった富への愛着や、生産的労働への子どもの導入や、不和を全体的調和の中で用いること、および不調和の間接的和合、を垣間見ることができる」

フーリエの「協同社会」の青写真の中には奇妙な要素や時代的制約による限界も少なくないが、資本主義社会とそこに生きる人間の本性の洞察に基づいた健全で進歩的で想像力をかき立てずにはおかない面も多々ある。

彼の“弟子”たち、たとえばレイ・ブランやプルードンが小ブルジョア的社會主義の思想を吹聴してフーリエの評価をおとしめたとしても、それはフーリエの責任ではないのだ。

[<「社會主義觀の変遷 民衆の苦惱と夢を映して」より>](#)

---

[<次へ>](#)



[注文する](#)

# シャルル・フーリエ伝

幻視者とその世界

ジョナサン・ビーチャー 著 福島知己 訳

本体6,800円 A5判上製

ISBN 4-87893-391-7 発行2001.05

## 【内容】

フランスの思想家シャルル・フーリエ(1772～1837)の代表的著作『四運動および一般運命理論』(巖谷國士訳・現代思潮社)は、ユートピア主義の聖典として同時代の人々に多大な影響を与え、多くのフーリエ主義者を生み出した。しかし、エンゲルスにより、オーエン、サン＝シモンとならんで『ユートピア的社会主義』とのレッテルを張られて以降、その思想は前科学的なものとして、長いこと軽んじられてきた。

それが、アンドレ・ブルトンによる再評価を機縁に、第二次大戦後さまざまな再評価がなされてきた。なかでも、1967年、フーリエの弟子たちが当時隠しておいた大著『愛の新世界』が刊行されてからは、フーリエの性愛と抑圧の分析に高い評価が与えられ、ラディカルなフロイトの先駆者とみなされるようになってきた。そのほか、ロラン・バルトによるユートピア的言語体系への言及(『サド、フーリエ、ロララ』)など、フーリエに対する関心は時代を追うごとに高まっている。

本書は、フーリエに関する本格的評伝で、ことにこれまではほとんど知られることのなかったフランス革命期時代のフーリエの動向を詳細に調べ、フーリエの全体像をはじめて明らかにした大著である。



## 【目次】

はしがき

序章

第1部 在野の独学者

第1章 幼年時代

第2章 革命の10年間

第3章 建築改革からの普遍的理論体系へ

第4章 地方小商店員

第5章 リヨン・ジャーナリズム

第6章 「作品上演の前に現れたパロディ」

第7章 「有徳の田園」

第8章 最初の弟子

第9章 大論執筆

第2部 理論

第10章 文明批判

第11章 情念の解剖学

第12章 理想共同体

第13章 調和社会の教育

第14章 調和社会の労働

第15章 愛の新世界

第16章 歴史と輪廻

第17章 宇宙詩

第3部 パリの予言者

第18章 大論発行

第19章 パリの地方人

第20章 『産業の新世界』

第21章 サン＝シモン主義者たち

第22章 機関紙創刊

第23章 ファランジュ建設

第24章 晩年

終章

訳者あとがき

原注 / 訳注

書誌

索引



第八百三十八夜 [0838] 03年08月28日

Seigow's Book OS / PIER

## シャルル・フーリエ 『四運動の理論』上下

1970・2002 現代思潮新社

Charles Fourier : Theorie des Quatre Mouvements et  
des Destinees Generales 1808

巖谷國士 訳

ミメロギア大賞発表中!



Ads by Google

**科学技術向け高速関数**

線形代数・フーリエ変換ほか 数値計算プログラムに最適

[www.xlssoft.com/jp](http://www.xlssoft.com/jp)

**時系列解析ツール Oscope**

データが活きる、分析が進む 体験無料ダウンロード実施中

[www.onosokki.co.jp](http://www.onosokki.co.jp)

[このサイトに広告を掲載](#)



パレ・ロワイヤルの狂人と言われていた。晩年はパレ・ロワイヤルのカフェや読書室で風変わりな常連として知られたせいだろう。その狂人フーリエが書いた『四運動の理論』が奇書でないはずがない。奇書なのだ。まさに奇書、それもとびきりの奇書である。ただし奇書というと、ふつうは書物の中に「奇」があるということになるのだが、フーリエの奇書は社会に実在する「奇」を企てたという意味では、活きた奇書だった。

もっともフーリエ自身は「奇」とは思っていない。『四運動の理論』がめざすもの、それは新しい**社会モデルの実験**だったのである。

結論からいうと、この社会モデル「アソシアシオン」(協同体)は、中心に「力」をもっている。その力は「関係」である。フーリエはそれを「情念引力」とよんだ。それゆえフーリエの理論は万有引力論ならぬ情念引力論となる。「愛の重力理論」などもよばれた。フーリエが考え出した基礎的情念は12を数えた。五感にあたる5つの「感覚(贅沢)情念」、友情・恋愛・野心・家族愛の4つの「感情情念」、そして密謀・交替・複合の3つの「配分情念」。これらが前後左右にマトリックス状につながって、系列(serie)と群(groupe)をつくっている。その相互関係を引きつけているのが情念引力であ



©現代思潮新社



松岡正剛の最新情報はこちら



いつでも見たい、松岡正剛





シャルル・フーリエ

る。

なんだこれはというほどに、抽象的か観念的か、もしくはわけがわからないものに見えるだろうが、フーリエは大真面目にこれらの充実した組み合わせを組織化することで、社会モデルとしてのアソシアシオンができあがると確信していた。それが「ファランジュ」というものだった。のちにフーリエ協同体ともよばれた。

アソシアシオン「ファランジュ」は1500人から2000人で構成される。理想的には1620人だというのだが、これは810におよぶ情念素が完全なシステムを形成するのに必要な人数の、2倍にあたっているらしい。フーリエが1819年に確立した理論にもとづくものだったが、その後にはフーリエ自身が「縮小規模実験体」を発案して、80家族・400人でも「試験ファランジュ」が設立できるとした。このようなファランジュの中心には、その建物だけでも自生自立しうる「ファランステール」という集合機能と集住機能をもったパビリオンが設定された。

それにしても、こういうことを聞かされただけでは、これはただの理念の遊びか、数字の遊びにすぎないとしか思えないだろう。ぼくもながらくそう思っていた。むしろフーリエの奇抜な文章と重力感覚の横溢をおもしろがって読んできただけだった。

しかしあるとき、下河辺淳さんや金子郁容さんらとの仕事で近代の“ブレボランタリー組織”の歴史を調べているときに(幼稚園・YMCA・赤十字・動物愛護協会・ボーイスカウト・慈善団体その他)、そうだそうだ、あれも見ておこうと思ってフーリエが提唱した共同体「ファランジュ」の周辺を追いかけてみたところ、その意外な実際の広がりには驚いた。

発祥のフランスにはコンデシュール・ヴェグルの**コロニー建設**をはじめとして、ギーズのファミリステール、サン・ドニの農業共同体、リーの農村児童の家、ドーフィネのポリモンドー協同体などが次々にできていて、イギリスでは農学者のヤングが参画して資金提供してからいくつものファランジュが生まれていた。

ロシアでは、ペトランシェフスキーがフーリエ主義運動の旗手となったことも手伝って、ここにはドストエフスキーも参加した。時期は遅れたが一番広がったのはアメリカで、マサチューセッツだけで30におよぶフーリエ協同体が出現



『シャルル・フーリエ伝』  
ジョナサン・ビーチャー  
作品社 2001



## 千夜千冊 BAC NUMBER

- 1144 『海上の道』 柳田国男
- 1143 『異装のセクシャリティ』 石井達朗
- 1142 『日本人の自画像』 加藤典洋
- 1141 『稲と鳥と太陽の道』 萩原秀三郎
- 1140 『猿と女とサイボーグ』 ダナ・ハラウ
- 1139 『カムイ伝』 白土三平
- 1138 『江戸の枕絵師』 林美一
- 1137 『ゲイ文化の主役たち』 ポール・ラル
- 1136 『悪徳の栄え』 マルキ・ド・サド
- 1135 『非常民の性民俗』 赤松啓介
- 1134 『日本創業者列伝』 加来耕三
- 1133 『市場の書』 ゲルト・ハルダッハ & ゲン・シリグ
- 1132 『女帝の手記』 里中満智子
- 1131 『日本 / 権力構造の謎』 上・下 カル・ヴァン・ウォルフレン
- 1130 『多文明共存時代の農業』 高谷好
- 1129 『木村蒹葭堂のサロン』 中村真一
- 1128 『江戸商売図説』 三谷一馬
- 1127 『性的差異のエチカ』 リュス・イリガ
- 1126 『インターネット資本論』 スタン・デス & クリストファー・マイヤー
- 1125 『ボランテア』 金子郁容
- 1124 『アヴァン・ポップ』 ライイ・マキャフ
- 1123 『笑いの経済学』 木村政雄
- 1122 『ぼくの哲学』 アンディ・ウォーホル
- 1121 『百物語』 杉浦日向子
- 1120 『女性の深層』 エーリッヒ・ノイマン
- 1119 『北条政子』 永井路子
- 1118 『ネット・ポリティクス』 土屋大洋
- 1117 『T.A.Z.』 ハキム・ベイ
- 1116 『江戸の身体を開く』 タイモン・スクチ
- 1115 『資本主義のハビトゥス』 ピエール・ルデュ
- 1114 『猫と小石とディアギレフ』 福原義
- 1113 『江戸の市場経済』 岡崎哲二
- 1112 『田中清玄自伝』 田中清玄・大須賀夫
- 1111 『黒い花びら』 村松友規
- 1110 『昭和という時代』 鈴木治雄対談録
- 1109 『澄み透った闇』 十文字美信
- 1108 『市場対国家』 ダニエル・ヤーギン・ヨゼフ・スタニスロー
- 1107 『負ける建築』 隈研吾
- 1106 『未来派』 キャロライン・ティズダール・ンジェロ・ボツォーラ
- 1105 『写真ノ話』 荒木経惟
- 1104 『建築的思考のゆくえ』 内藤廣
- 1103 『バイ・バイ・キップリング』 ナム・ジン・バイク
- 1102 『コンセプチュアル・アート』 トニー・フリー
- 1101 『モダンデザイン批判』 柏木博
- 1100 『型の日本文化』 安田武
- 1099 『ニジンスキーの手記』 ヴァーツラ





『四運動の理論』  
上下  
シャルル・フー  
リエ  
現代思潮社 1970

し、コンシデランが移住してからはテキサスに多機能型のファランステールが建てられた。

いったい、これは何なのか。何の魅力が人々を引き付けたのか。なぜフーリエの「奇」はこれほど受け入れられたのか。それがどうして短期間に各地に広がっていったのか。これは腰をすえて、いつか考えなければなるまいと思っただけである。

では他方、それほど実践的だったファランジュやファランステールを作り上げたフーリエが、なぜにまた「バレ・ロワイヤルの狂人」などとよばれたのか。やっぱりフーリエはおかしくなかったのか。そこも改めて視点を変える必要がある。

いや、そもそもフーリエはいったいどういう理由でアソシエーション「ファランジュ」を発想し、そこに情念と引力などを持ちこもうとしたのか。これまた、考えこまざるをえなくなってきた。

英語のアソシエーションには結社とか協会とか組合という意味がある。もともとアソシエーションは「組み合わせること」をいう。そのような意味と形態の原型は、実はフランスに発芽していた。それがアソシエーションである。協団体とか協同組織と訳している。

フランスの産業革命が本格化したのは、1830年代である。これによって都市問題・労働問題・交通機関問題・工場問題などが一挙に噴き出てきた。アソシエーションはこれらの問題を克服するために発想された協同活動単位のことである。日本でいえばかつての生協がさまざまな運営法や流通問題にとりくんだように、また今日のNPO法人がそれぞれ独自性を誇ろうとしているように、そのころのアソシエーションもそれぞれが競いあっていた。フーリエはこれに着目したわけなのである。

つまりすでにアソシエーションはあったのだ。

が、このままではバラバラになる。フーリエはこのような情勢のなか、のちに「空想的社会主義」とよばれることになる“空想”をした。いや、それは空想ではなく、きわめて社会的なアソシエーションの実践的改革だったというべきである。

だいたい空想的社会主義という呼称はまったく実態にあわないもので、これは実証主義とブレ社会主義と産業的生活主義が会ったものといったほうがいい。シャルル・フーリエもサン・シモンも、まったく“空想的”ではなかった。これ



モンマルトル墓地  
のフーリエの墓

- ジンスキー
- 1098 『ゴシック』アンリ・フォション
- 1097 『小村雪岱』星川清司
- 1096 『ジョージア・オキーフ』ロリー・ライ
- 1095 『黒澤明と早坂文雄』西村雄一郎
- 1094 『フェルメール』アンソニー・ペイリ
- 1093 『八大山人』周士心
- 1092 『日本の失敗』松本健一
- 1091 『幕末の天皇』藤田覚
- 1090 『徳川イデオロギー』ヘルマン・オース
- 1089 『花鳥の使』尼ヶ崎彬
- 1088 『室町の王権』今谷明
- 1087 『異神』山本ひろ子
- 1086 『西田幾多郎哲学論集』西田幾多
- 1085 『クレオール主義』今福龍太
- 1084 『帝國的ナショナリズム』大澤真幸
- 1083 『文明の衝突』サミュエル・ハンチ
- 1082 『アンチ・オイディプス』ジル・ドゥル
- 1081 『イメージ連想の文化誌』山下圭一
- 1080 『「国語」という思想』イ・ヨンスク
- 1079 『アフォーダンス』佐々木正人
- 1078 『エイズ』畑中正一
- 1077 『ゲーム理論を読みとく』竹田茂夫
- 1076 『自己組織化と進化の論理』スチート・カウフマン
- 1075 『プログ』ダン・ギルモア
- 1074 『全体性と内蔵秩序』デヴィッド・オ
- 1073 『メス化する自然』デボラ・キャドハ
- 1072 『ネオテニー』アシュレイ・モンター
- 1071 『天皇誕生』遠山美都男
- 1070 『闇の奥』ジョーゼフ・コンラッド
- 1069 『利己的な遺伝子』リチャード・ドース
- 1068 『美学入門』中井正一
- 1067 『ゴドーを待ちながら』サミュエル・
- 1066 『複雑性とパラドックス』ジョン・キ
- 1065 『ハッカー宣言』マッケンジー・ワー
- 1064 『情報化爆弾』ポール・ヴィリリオ
- 1063 『オートボーイエシス』ウンベルト・
- 1062 『ナチュラル・ウーマン』松浦理英
- 1061 『時間の矢』リチャード・モリス
- 1060 『生命を捉えなす』清水博
- 1059 『自我と脳』カール・ポパー & ジョ
- 1058 『ゲーデル再考』ハオ・ワン
- 1057 『近代日本少年少女感情史考』北
- 1056 『ゼーロン・淡雪』牧野信一
- 1055 『銀座の米田屋洋服店』柴田和子
- 1054 『日本の絵本史』鳥越信編
- 1053 『吉田一穂大系』吉田一穂
- 1052 『廃墟の歩き方』栗原亨
- 1051 『近代美人伝』長谷川時雨
- 1050 『化石』井尻正二
- 1049 『日本文学史』小西甚一
- 1048 『北原白秋集』北原白秋
- 1047 『アメリカン・マインドの終焉』アラ
- 1046 『後水尾院』熊倉功夫
- 1045 『近代絵画論』1・2・3 ジョン・ラスキ
- 1044 『鉱物学』森本信男・砂川一郎・都
- 1043 『生命とは何か』エルヴィン・シュ
- 1042 『暗黙知の次元』マイケル・ボラン
- 1041 『東洋の無』久松真一
- 1040 『聖少女』倉橋由美子
- 1039 『意』の文化と情の文化』王敏
- 1038 『秀吉の野望と誤算』笠谷和比古



はのちのマルクスやエンゲルスが打ち出した社会主義から見て、かれらが“空想的”ではあれ先駆していたという意味でつけられた呼称にすぎない。

それはともかくも、フーリエはこうした時代情勢のなか、いったいどのような理念で、どのように組み立てれば、新たな協同組織(アソシアシオン・ヌーボー)が産業革命社会の只中でできあがるのか、そこに着手していくことにした。すでに具体的な組織は見えていた。改善点は見えている。けれどもフーリエは、のちにのべる理由によって、自分の仕事を厳密に組み立てたいと考えていた。

そこで最初に理念をたてた。

バラバラな活動をつなげるためにはいったい何が必要なのか。フーリエは考える。必要なのは、いわば引力である。互いを引きつけ、互いを引きあう引力がほしかった。しかし人間は物体ではないので、何をもって引力のはたらきと見ればよいのか、そこがわからない。フーリエは人間の感覚や活動から、質量や速度や位置や摩擦にあたる人間力学的な要素を導き出していくことにする。

こうして最初に着手したのが膨大なノートであった。これはのちに『大論』になる。フーリエ協同体のためのマスタープランといってよい。これでおよその骨格が見えてきた。そこで人々にプランの一部を話しかけてみると、予想以上の反応がある。フーリエは自信を深める。しかしまた、まったく理解されないところがあることも見えてきた。

そこでフーリエは具体的な説得対象としての男女にむけて、そのマスタープランの一部を切り出すことにする。それが『四運動の理論』なのである。読めばその法外な内容とともに、フーリエが「普遍のためのアナロジー」に徹していることがすぐ伝わってくる。

フーリエがとりくんだのは、デカルトの『情念論』では語りきれなかった情念の性質をあきらかにすること、その情念に運動を与えること、情念の型を分類してそれらを配置させること、それらが引きあう可能性を予想すること、そのうえで調和や親和の本質を突き出すこと、こういうことだった。

しかし他方で、フーリエはそのようなことが理論化されても(徹底的に理論化したのであるが)、働く民衆たちに理解されるとはかぎらないことも知っていた。かれらは毎日肉



フーリエが晩年  
過ごしたパリ

田慶一	
1037	『日本の現代美術』菅原教夫
1036	『日本の前衛絵画』中村義一
1035	『造形思考』パウル・クレー
1034	『ベルニーニ』石鍋真澄
1033	『音、沈黙と測りあえるほどに』武
1032	『古楽とは何か』ニコラウス・アー
1031	『絵画の自意識』ヴィクトール・スト
1030	『伽藍が白かったとき』ル・コルビ
1029	『構成的権力』アントニオ・ネグリ
1028	『恐怖の権力』ジュリア・クリステウ
1027	『カリガリからヒトラーへ』ジークフ
1026	『母権制』ヨハン・ヤコブ・パハオー
1025	『清沢満之』藤田正勝・安富信哉
1024	『西洋の没落』オスヴァルト・シュ
1023	『ツァラトストラかく語りき』フリード
1022	『絹と明察』三島由紀夫
1021	『インド古代史』中村元
1020	『レトリック』オリヴィエ・ルブール
1019	『新幾何学思想史』近藤洋逸
1018	『書物の出現』リュシアン・フェーブ
1017	『近代日本のメディア・イベント』津
1016	『山の民・川の民』井上鋭夫
1015	『ノンちゃん 雲に乗る』石井桃子
1014	『エットレ・ソットサス』ジャン・バ
1013	『細川ガラシャ夫人』三浦綾子
1012	『迷宮としての世界』グスタフ・ルイ
1011	『日本史の誕生』岡田英弘
1010	『イコノスタシス』阿木謙
1009	『確率の哲学的試論』ピエール・シ
1008	『仁齋・徂徠・宣長』吉川幸次郎
1007	『クルト・ヴァイル』岩淵達治・早崎
1006	『魔都』久生十蘭
1005	『虚数の情緒』吉田武
1004	『池袋モンパルナス』宇佐美承
1003	『鶴の眼』石田波郷
1002	『聖なる空間と時間』ミルチャ・エリ
番外	退院報告と見舞御礼
1001	『エレガントな宇宙』ブライアン・グ
	[1] [2] [3] [4] [5]
1000	『良寛全集』良寛
0999	『オデュッセイアー』ホメーロス
0998	『南総里見八犬伝』滝沢馬琴
0997	『水戸イデオロギー』ヴィクター・コ
0996	『伝習録』王陽明
0995	『過程と実在』アルフレッド・ノース
0994	『ライブニッツ著作集』ウィルヘル
0993	『玄語』三浦梅園
0992	『本居宣長』小林秀雄
0991	『おくのほそ道』松尾芭蕉
0990	『さかしま』ジョリ・カルル・ユイス
0989	『産霊山秘録』半村良
0988	『正法眼蔵』道元
0987	『漢字の世界』白川静
0986	『免疫の意味論』多田富雄
0985	『はにかみの国』石牟礼道子
0984	『バルテュス』クロード・ロワ
0983	『連環記』幸田露伴

を酷使し、毎日欲望に飢え、毎日喜怒哀楽を表現しているものたちだった。かれらに新たなアソシアシオンを感じさせるにはもっと肉体的で、もっと欲望的で、もっと喜怒哀楽的な説得が必要だということを知る。

そのためにフーリエが採った方針は、肉体も欲望も喜怒哀楽も抑制しないということを強く訴えることだった。こうしてフーリエは「愛」と「性」を積極的にもりこんだ説明に傾いていく。この傾きは度が過ぎたといえるほど、フーリエ自身の肉体や欲望をめくれあがらせたようだった。このためフーリエは、のちのちに「性の享楽」を煽ったのではないかと責められる。

いったいフーリエがどういう人物だったかということを書いておく。フーリエの理論は、フーリエの人生と切っても切れないものをもっている。

シャルル・フーリエはブザンソンの織物や香料を扱う富裕な卸業の家に生まれたわりに、父親の死などの不運がつづいて、20歳には商業の見習をし、そのあとは商人になっている。商人としてはフランス全土ばかりかヨーロッパ中をまわっていた。その後にリヨンに落ち着いた。この、フーリエが商人であったということがこのほか大きい意味をもっている。

ミシュレの『フランス革命史』には、「誰がフーリエを作ったのか。ランジュでもバブーフでもない。リヨンだけがフーリエの先駆者なのだ」という一節がある。それほどリヨンという土地がフーリエに与えた影響が大きかった。1784年には、魔術師カリオストロがリヨンにあらわれて秘密結社のロージュを開いた。1793年にはフーリエ自身が商取引上のことで逮捕と疑獄を体験した。19世紀になると、リヨンはある意味でアウトサイダーが群をなし、屯(たむろ)して、ありとあらゆる犯罪と欲望を吸収するような都市になっていた。

しかしこのリヨンの喧噪と闇こそがフーリエに新たな見通しをもたらしたのだった。フーリエは商業や取引の裏の意味を詳細に知っていく。のみならず、大半の商業や取引に欠けているものを発見する。それは、すべては「計算方法」によって、どのようにも社会と人間の価値が変わっていくということだった。フーリエはしばらく“ニュートン的な計算”に没入し、その引力を人間社会にあてはめても十分に活用できると考え始めたのである(フーリエの計算好きや数学好きには呆れるばかりだ)。

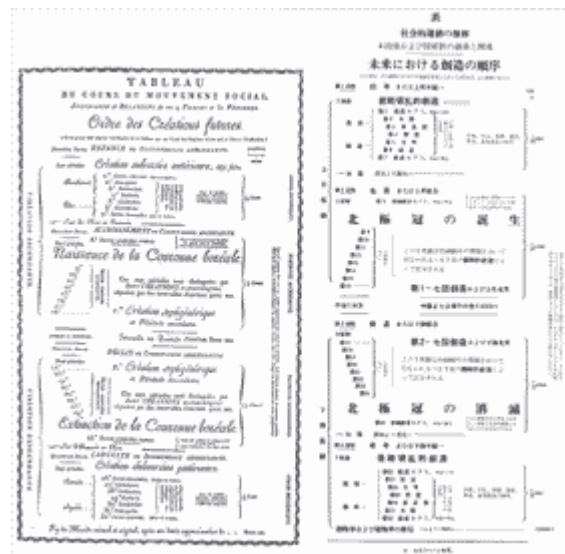
- 0982 『世界大博物図鑑』 荒俣宏  
0981 『かたち誕生』 杉浦康平  
0980 『グレン・ゲールド著作集』 グレン・ゲールド  
0979 『対称性人類学』 中沢新一  
0978 『ライト自伝』 フランク・ロイド・ライト  
0977 『砕け散るものの中の平和』 アンリ・ヨー  
0976 『病める舞姫』 土方巽  
0975 『東京セブンローズ』 井上ひさし  
0974 『近松浄瑠璃集』 近松門左衛門  
0973 『駱駝祥子』 老舍  
0972 『ボオ全集』 エドガー・アラン・ポー  
0971 『火の鳥』 手塚治虫  
0970 『ヴィルヘルム・マイスター』 ヨハン・オルフガング・ゲーテ  
0969 『解明される意識』 ダニエル・デケ  
0968 『うつろ舟』 澁澤龍彦  
0967 『とはずがたり』 後深草院二条  
0966 『穀子一擲』 ステファヌ・マラルメ  
0965 『クラフトワーク』 パスカル・ビュッシ  
0964 『本朝画人傳』 村松梢風  
0963 『半七捕物帳』 岡本綺堂  
0962 『レ・ミゼラブル』 ヴィクトル・ユゴー  
0961 『戦艦大和ノ最期』 吉田満  
0960 『野火』 大岡昇平  
0959 『知識の灯台』 デレク・フラワー  
0958 『ザメンホフ』 伊東三郎  
0957 『弓と豎琴』 オクタヴィオ・パス  
0956 『ナショナリズム』 姜尚中  
0955 『日本精神分析』 柄谷行人  
0954 『南天堂』 寺島珠雄  
0953 『未来のイヴ』 ヴェリエド・リラダン  
0952 『李白詩選』 李白  
0951 『阿闍世コンプレックス』 小此木啓北山修 編  
0950 『カラマーゾフの兄弟』 フョードル・エフスキー  
0949 『東海道四谷怪談』 鶴屋南北  
0948 『絶え間なき交信の時代』 ジェーム・カツツ&マーク・オークス編  
0947 『春宵十話』 岡潔  
0946 『ユダヤ人とは誰か』 アーサー・ケラー  
0945 『百禁書』 ニコラス・キャロライズ他  
0944 『リヴァリアサン』 トマス・ホップズ  
0943 『鈴木いづみコレクション』 鈴木いづみ  
0942 『日本改造法案大綱』 北一輝  
0941 『神もなく主人もなく』 ダニエル・ゲ  
0940 『サンクチュアリ』 ウィリアム・フォー  
0939 『南方録』 南坊宗啓  
0938 『吉井勇歌集』 吉井勇  
0937 『会社はこれからどうなるのか』 岩人  
0936 『神経政治学』 ティモシー・リアリー  
0935 『失われた時を求めて』 マルセル・  
0934 『秀吉と利休』 野上弥生子  
0933 『新・手話辞典』 手話コミュニケー  
0932 『不合理ゆえに吾信ず』 埴谷雄高  
0931 『侏儒の言葉』 芥川龍之介  
0930 『インダクション』 ホランド、ホリオ  
0929 『忍びの者』 村山知義  
0928 『イコノロジー研究』 エルヴィン・パ  
0927 『狂雲集』 一休宗純  
0926 『ゲニウス・ロキ』 クリスチャン・ノ  
0925 『建礼門院右京大夫集』 建礼門院  
0924 『デザイナーは喧嘩師であれ』 川島男

このあとのフーリエの活動は省くけれど、フーリエは緻密な計算を使いさえすれば、人間の情念は司ることが可能だということまでのぼりつめていった。社会は情念引力が司ることによって均衡と安定を保つのではないかと、結論づけた。しかし、リヨンを見ているうちに、そのような理想社会は少人数によるモデル的社会にしておくべきだろうということも、見えてきた。

こうしてアソシアション「ファランジュ」が誕生していったのである。『四運動の理論』にフーリエは書いている、「発見はどんなやりかたで予告されてもかまわないのではないか」。

なるほど、フーリエは新しい社会の単位を発見したかったのである。この単位、その後すべての社会組織の単位となったものが多い。協会、組合、協同組合、労働組合……これらはみんなフーリエの子供たちだった。

では、それなのになぜフーリエは「パレ・ロワイヤルの狂人」だったのかといえば、フーリエ自身は予告者であり発見者であって、“参加する一人”ではなかったからである。それに「情報引力」の質量源であるシャルル・フーリエという太陽だか地球だか、そんなに動きまわっては、おかしくなる。ただフーリエはちょっとばかり街をうるつきすぎて、狂人扱いをされたのだった。



表『4段階および32期劃の継承と関連』フランス語版(左)と日本語版(右)

- 0923 『冬の夜ひとりの旅人が』イタロ・カヴィーノ
- 0922 『富永太郎詩集』富永太郎
- 0921 『ねじ式・紅い花』つげ義春
- 0920 『北越雪譜』鈴木牧之
- 0919 『アンビヴァレント・モダーンズ』ロンス・オルソン
- 0918 『音と言葉』ウィルヘルム・フルトウグラ
- 0917 『日本橋』泉鏡花
- 0916 『存在と時間』マルティン・ハイデガ
- 0915 『超薬アスピリン』平澤正夫
- 0914 『この国のかたち』司馬遼太郎
- 0913 『神曲』ダンテ・アリギエーリ
- 0912 『白書』ジャン・コクトー
- 0911 『テレビジョン』ジャック・ラカン
- 0910 『神仏習合』達日出典
- 0909 『確実性の終焉』イリヤ・プリゴジン
- 0908 『パサージュ論』ヴァルター・ベンヤ
- 0907 『「敗者」の精神史』山口昌男
- 0906 『武原はん一代』武原はん
- 0905 『聖杯と剣』リーアン・アイスラー
- 0904 『賭博と国家と男と女』竹内久美子
- 0903 『メディアの理論』フレッド・イング
- 0902 『戦争とプロバガンダ』エドワード・ード
- 0901 『死ぬことと生きること』土門拳

- 801—900
- 701—800
- 601—700
- 501—600
- 401—500
- 301—400
- 201—300
- 101—200
- 001—100

各ナンバーをクリックすると、別ウィンドウで一覧が表示されます。

千夜千冊の小窓

書名、または著者名からバックナンバーを検索できます

探す

